

第83回麻布獣医学会 一般演題1

犬の上顎及び下顎の高分化型線維肉腫に関する臨床研究

関 いづみ, 信田 卓男, 圓尾 拓也, 伊藤 哲郎, 武田 晴央, 福山 泰広

麻布大学附属動物病院腫瘍科

[はじめに]

犬の上顎及び下顎に発生する高分化型線維肉腫は病理組織学的には悪性度の低い所見を示し、増大スピードも遅いが、局所浸潤性が極めて強く、患者のQOLを著しく低下させる。

[方法と材料]

今回1998年5月～2007年2月までに麻布大学附属動物病院に来院し、上顎または下顎に発生した腫瘍において、病理組織検査で高分化型線維肉腫と診断された31例に対し発生状況、治療の有無、それぞれの治療を行った場合の生存期間について分析を行った。

[結果]

犬種はゴールデンレトリバーが23例と多く、その他にミックス犬が3例、柴犬、シベリアンハスキー、ドーベルマンピンシャー、ビーグル、ミニチュアダックスで各1例発生が認められた。性別はオス18例(去勢雄2)、メス13例(避妊雌7)、平均年齢は7歳11ヶ月(4歳4ヶ月～13歳9ヶ月)、平均体重は29.9 kg(6.74 kg～48 kg)であった。発生部位は上顎24例、下顎7例であった。初診時のTNMはTカテゴリーにおいてはT1が1例、T2が2例、T3が28例であった。Nカテゴリーにおいては、N1が2例、N2が1例であった。MカテゴリーはM1が1例のみであっ

た。治療は、無治療の症例が18症例、治療を行った症例が13症例であった。治療を行った13症例の内容は外科治療のみ5例、化学療法のみ1例、放射線療法のみ1例、外科療法+化学療法3例、外科療法+放射線療法3例であった。経過を追うことが出来た29症例の初診時からの中央生存期間は288日であった。無治療の18症例において経過を追うことが出来た16症例の中央生存期間は222日であるのに対し治療を行った症例は370日であった各治療方法による生存期間は、外科治療のみ394日、化学療法のみ159日、放射線療法のみ341日、外科療法+化学療法364日、外科療法+放射線療法416日であった。外科治療を行った群と行わなかった群とでは、行った群が11症例で中央生存期間が392日、行わなかった群18症例は225日であった。

[考察]

以上のことより高分化型線維肉腫は高齢の大型犬、特にゴールデンレトリバーの上顎に多く発生し、初診時にはすでに進行している症例が多いものの、遠隔転移を示す症例は少なかった。また局所治療群は無治療群より有意に生存期間が延長していた。各治療法での生存期間の検討においては外科治療を行った群が、他の治療群に比べ長い結果となった。